

身体教育を通じた身体観の変容可能性の探究（その1）

—運動実践における「まなざし」の考察から—

高 橋 浩 二

The Possibility for Changing the Viewpoint of Human Body through Physical Education (No.1): A Consideration of “Regard” in Movement Practice

TAKAHASHI Koji

Abstract

The purpose of this paper is to show the possibility for changing the viewpoint of human body by movement practice. In order to show this possibility, a consideration of the relationship between “regard” and the practice of human movement is necessary.

The results are as follows. (1) “Regard” is closely related to the human body. It is necessary to correspond to others that we always need to be successful in our interaction with others. (2) “Regard” makes interaction with others possible. This interaction brings about most direct and purest relationships with others. This “regard” has three functions, namely, of “cutting out”, “giving meaning” and “acting consistently”. (3) “Regard” is a function based on the category of one’s own body. This category of the body is established in the “absolute here”. That is, we work on others by presenting “regard” from one’s own body. Through this examination, “I” can find the interaction at the physical level. It is “physical interaction” with others that is based on “physical communication” or “physical injection”.

(4) The possibility for changing the viewpoint of human body by movement practice depends on learning the practice of “regard”. A change in the human body leads to a change in “regard”. Especially, it is possible to take on a new viewpoint of human body in physical education. This viewpoint is based on the peculiarity of our own body.

Keywords: viewpoint of human body, “regard”, movement practice, interaction

キーワード：身体観, 「まなざし」, 運動実践, 相互作用

平成21年11月20日 原稿受理

大阪産業大学 人間環境学部スポーツ健康学科講師

序.

本研究の最終目的は、身体教育を通じた身体観の変容可能性を示すことである。この目的のために、以下のように考察を進める。(1) 本稿では、運動実践における[まなざし]を身体運動との関係から考察する。この考察を通じて、運動実践による身体観の変容が[まなざし]の変容によって可能になることを示したい。(2) 次稿では、身体教育において扱うことができる身体観について考察する。この身体観は、[まなざし]によって他者と関係づけられた「固有の身体」を基盤として生じている。この考察を通じて、[まなざし]と身体観との関係を明確にし、身体観教育の必要性を検討したい。(3) 最終稿では、身体観教育の具体的内容及び学習方法を検討する。この検討を通じて、身体教育を通じて育成することのできる一つの事柄として身体観を位置づけ、その変容可能性を提示したい。

一般的に[まなざし]は、「見ること」と関係しており、感情を伴っている語と言えよう。例えば、[まなざし]は「目つき」や「目の表情」を意味し、「冷たい」や「熱い」等の形容詞が加えられて用いられる。しかし、行為者本人がその内容を把握することは困難である。したがって、[まなざし]は行為主体ではなく、[まなざし]を向けられる相手、それを傍観している第三者が用いてきた用語と解釈することができよう。一方、主体である〈私〉¹⁾が他者に対して[まなざし]を向ける時、あるいは、他者から[まなざし]を向けられる時には、[まなざし]を向けている行為者の意図を理解することができる。したがって、その状況に居合わせている両者にとって[まなざし]は、単に「目つき」や「目の表情」だけではない意図が伝達されていると言えよう。以上の説明から、本稿においては[まなざし]を次のように捉えたい。すなわち、[まなざし]は、「単に見ること」や「観察」とは異なり、行為者の意図が働いた状況で対象に対して注意を向けて見ること、を指す。

本稿では、[まなざし]と身体との密接な関係性が明らかにされる。さらに、運動実践場面における[まなざし]の現われ方が、他者との相互作用についての考察から検討される。以上の考察を通じて、他者との相互作用の基盤となる「身体の相互作用」が示される。結論として、運動実践による身体観の変容可能性が示され、それを教育として担うのが身体教育であることを提言したい。

では、なぜ[まなざし]が考察対象となるのか。ここでは動機を説明することによって問題の所在を明らかにしたい。それは、〈私〉がどのように他者の運動を把握しつつ彼らの動作に対応しているのか、という動機である。この動機は、「〈私〉にとって対象がどの

1) 本稿における〈私〉は主体一般を指している。〈私〉とは別の主体を「他者」と表す。また、〈私〉と具体的に関係している他者は「相手」と表す。

ように立ち現れるのか」という問いを生じさせる。例えば、体育・スポーツに関係する者なら、多くの人が次の指示を聞いたことがあるだろう。すなわち、「ボールをよく見なさい」や「相手をよく観察しなさい」という指示である。これらの指示は、学習者が目的を達成するために必要と考えられよう。その目的は、例えばボールを巧みに扱うこと、相手の動作に巧みに対応すること、である。しかし、これらの指示が学習者に明確な意味を与えているとは限らない。なぜなら、彼らがこれらの指示を聞き、対象に注意を向けたとしても、指導者の意図を達成できるとは限らないからである。学習者は、指示の意図を十分理解しないまま試行錯誤することにもなる。では、彼らは最終的にどのようにしてそのような状況を実践の中で解決しているのだろうか。この問いを解決するためには、〈私〉が対象へ注意を向ける有り様に着目する必要がある。本稿では、特にその有り様について哲学領域において考察されている「まなざし」を取り上げ、体育学の領域として考察したい²⁾。なお、本稿の考察方法は現象学的観点をとっている³⁾。

1. [まなざし]の基盤となる身体性—哲学における「まなざし」の考察から—

本節では、[まなざし]についての哲学的考察を参照し、次の事柄を検討したい。まず、[まなざし]と身体との密接な関係性である。この関係性を検討するために、[まなざし]が何によって構成されているのかについて問う。本節では、M.メルロ＝ポンティ及びJ.P.サルトルの「まなざし*regard*」についての見解を参照する。この検討によって、[まなざし]の基盤が身体性にあることを示したい。次に、「まなざし*Blick*」による「他者との相互作用」についてである。G.ジンメルに従えば、人間が互いに[まなざし]を向け合っている時に「もっとも生き生きした相互作用」が現れる。この検討から[まなざし]の働きを示したい。さらに、「まなざしによる相互作用」の基盤となる身体性についてである。H.シュミッツは、この相互作用が「身体的コミュニケーション」における「身体的自己移入」から成立可能であることを論じている。これらの検討を通じて、「まなざしによる相互作用」が「身体

2) 同様の考察は、金子によってなされている。金子明友, [2009], 『スポーツ運動学』, 明和出版, 300-303頁。金子が基礎理論としているマイネルの著作においても[まなざし]が取り上げられ、それが「運動観察の前提」として考察されている。マイネル, K., 金子明友編訳, [1998], 『マイネル遺稿 動きの感性学』, 大修館書店, 85-103頁。

3) 体育学における現象学的考察については次の著書を参照されたい。瀧澤文雄, [1995], 『身体の論理』, 不昧堂出版。同様に、[まなざし]に関連した考察については次の論文を参照されたい。高橋浩二, [2008], 「運動実践の基盤となる『身体の相互作用』—〈他者〉との相互作用についての現象学的考察—」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学会, 第30巻2号, 113-126頁。

の相互作用」を根拠として成立していることを示したい。

1-1. [まなざし] と身体との密接な関係性

〈私〉の[まなざし]は何によって構成されるのだろうか。例えば、メルロ＝ポンティは、次のように[まなざし]と身体及び身体運動との関係について述べている。すなわち、「私の動く身体は目に見える世界に属し、その一部をなしている。だからこそ、私は自分の身体を〈見えるもの〉(le visible)のなかで自由に動かすことができるのだ。他方また、視覚が[身体の]運動に依拠していることも事実である。見えるのは、眼なざしを〈向けている〉ものだけなのだ。」⁴⁾彼の指摘は次のように理解できよう。(1)〈私〉は自らの身体を目で見ることができ。それは、〈私〉が自らの身体を対象化できる、ということである。しかし、それは身体の一部でしかない。(2)〈私〉の視覚は「身体としての〈私〉」から切り離すことができない。なぜなら、〈私〉の視覚は常に身体として働いているからである。だからこそ〈私〉は、目によって見えている状況を把握し、その中で自由に動くことができるのである。(3)したがって、〈私〉の実践の仕方によって[まなざし]を向けることのできる対象が異なる。

以上のように、[まなざし]は身体から切り離して考えることができない。メルロ＝ポンティは、「身体はむしろ他の一切の表出空間の根源であり、表出の運動そのものであり、それによってはじめて意味が一つの場所をあたえられて外部に投射され、意味がわれわれの手もとに、われわれの眼下に物として存在しはじめるようになる。」⁵⁾と指摘している。つまり、身体運動に関わる〈私〉の身体が〈私〉に運動実践の意味を与え、それによって見え方が変わるということである。彼の指摘は、運動実践における[まなざし]について考察する時、重要な意味を持つことになる。なぜなら、運動実践において〈私〉は身体運動を意図的に行い、身体に対する注意を高めることができるからである。すなわち、〈私〉はこの注意によって[まなざし]の働き、対象及び内容に対して自覚的になることができる。また、〈私〉が自らの身体能力及び運動を実践する能力を把握することができれば、自らの身体運動を適切に起こすことができるからである。すなわち、自らの[まなざし]の限界を実践中に把握することができれば、その範囲内で実践をおこなうことができる。

このように、運動実践における[まなざし]は、必要最低限に制限された形で生ずる。それは、運動を実践する能力が私の身体能力によって規定されているからである。例えば、

4) メルロ＝ポンティ, M., 滝浦静雄・木田元訳, [1966], 『眼と精神』, みすず書房, 257頁.

5) メルロー＝ポンティ, M., 竹内芳郎・小木貞孝共訳, [1967], 『知覚の現象学1』, みすず書房, 245頁.

「〈私〉が3m先に跳ぶことができる」という能力が、運動を実践する能力を規定している。では、その時の「まなざし」は〈私〉にどのような意味を与えるのか。ここで、サルトルにおける「まなざし*regard*」を参照し、「まなざし」の成立について考察したい。彼は、「まなざしによってわれわれに顕示されたのは、他者の疑うべからざる存在であり、かかる他者にとってわれわれが存在するということである。」⁶⁾と述べ、「まなざし」による「存在開示」を指摘している。このことは、運動実践から考えるとどういうことなのか。ここでは、剣道を例に挙げて考察したい。例えば、〈私〉が相手と向かい合う時、〈私〉は「まなざし」によって相手の出足を探ろうとする。この時〈私〉は、相手が「まなざし」によって〈私〉の出足を探ろうとしていることについて了解する。〈私〉は相手に〈私〉の出足を読み取られないように、相手の「まなざし」に対処しようとする。この時〈私〉は次の内容について自覚している。すなわち、〈私〉に対して相手が現れている様子、相手に対して〈私〉が現れている様子である。なお、この時に〈私〉が相手の「まなざし」に対処しようとして相手の出足に注意を向けられなくなってしまうことがある。この問題をサルトルは、「私が相手のまなざしに私の注意を向けるときには、それと同時に、私の知覚が解体し、背景へと移らざるをえない。」⁷⁾と指摘している。だからこそ〈私〉は、相手の出足にも〈私〉の出足にも注意を向けことができなくなってしまう、一歩も動けずに相手に打ち込まれることがあるのである。したがって〈私〉は、相手に打ち込まれないために相手を「物として」対象化し、「まなざし」による相互作用を破壊しなければならない。反対に、〈私〉の「まなざし」に相手の注意を向けさせることができれば、〈私〉は相手の動作に注意を向けやすくなるだろう。このことは「相手を支配する」とも言えよう。しかし、この支配はサルトルにおける「物としての対象化」と同じである。このような「まなざし」では、〈私〉は相手との相互作用を通じた適切な対応を実現することができない。剣道において〈私〉が相手に打ち込むことができる、ということは、常に相手の動作に注意を向け、その動作にいつでも対応することができるということである。そのためには、相手を「物として」対象化するのではなく、「まなざし」による相互作用を通じた他者との直接的な関係を形成する必要がある。この関係は、〈私〉の身体能力に規定された「まなざし」によって生ずる関係である。この関係を形成する能力である「まなざし」は、サルトルにおける「物としての対象化」とは異なる。この「まなざし」は、「固有の領分」を構成する身体を基準にしている。すなわち、フットサルが、「絶対的なことというゼロ

6) サルトル, J-P., 松波信三郎訳, [2007], 『存在と無 現象学的存在論の試みⅡ』, ちくま学芸文庫, 167頁.

7) サルトル, [2007], 同上書, 106頁.

地点の物体である私の身体」⁸⁾が「固有の領分」を構成すると述べているように、〈私〉の身体を基準とした「まなざし」があるからこそ相手に対応した運動実践が可能になるのである。このことについては、メルロー＝ポンティも「私の身体に適用された〈此処〉という言葉は、(中略)、第一次的な座標の布置、ある対象への活動的な身体の投錨、自己の任務に直面した身体の状態なのである。」⁹⁾と述べている。サルトルのような「物として」対象化する「まなざし」では、〈私〉と他者との関係を「他者に巧みに対応する相互作用」という観点から捉えることはできない。あくまで一方向的な「まなざし」に過ぎない。では、他者との相互作用において「まなざし」はどのように現れるのか。次項では、この相互作用に着目して「まなざし」を考察したい。

1-2. 「まなざし」による相互作用—ジンメルとの相互作用論から—

この「まなざしによる相互作用」について考察しているのがジンメルである。彼は、「まなざし (*Blick*) は人びとを目から目へと織りあわせて、もっとも生きいきした相互作用へ引き入れる」(括弧内引用者)¹⁰⁾と述べ、相互作用が成立する根拠としての「まなざし」について考察している。その「まなざし」が直接的な「主体-他者関係」を成立させる¹¹⁾。すなわち、〈私〉と他者の相互注視は〈私〉が他者を見るだけでは成立しない。相互注視は、〈私〉が他者から見られていることに気づき、「まなざし」を向け合っている時にのみ成立するのである。この時の「見ること *Sehen*」の過程についてジンメルは、次の三つの機能によって成立すると述べている。すなわち、(1)「切って取り出すこと (*Herausschneiden*)」、(2) 意味を与えること (*Sinn-Geben*)、(3) 統一体を成すこと (*Einheitlichkeit*)」(括弧内引用者)¹²⁾である。これらの機能を伴った「見ること」、すなわち「まなざし」による他者への働きかけによって、〈私〉は他者と相互作用を成立させている。

例えば、〈私〉は立ち居振る舞いから他者の運動能力を把握しようとする。特に、〈私〉

8) フッサール, [2001], 前掲書, 220頁.

9) メルロー＝ポンティ, [1967], 前掲書, 175頁.

10) ジンメル, G., 居安正訳, [1994], 『社会学・下』, 白水社, 249頁. 原著, 723頁.

11) ジンメルによれば、この関係は「他者を自己に受け入れるまなざしにおいて、人は自己自身を表明する。主体が彼の客体を認識しようとするその同じ行為によって、ここでは主体は客体に自己をゆだねる。」(ジンメル, [1994], 同上書, 249頁. 原著, 724頁) という関係である。また彼は、「人間は他者にとっては、他者が彼を見たからと言って、けっしてすでに完全にそこにいるのではなく、むしろ彼もまた他者を見たばあい、はじめてそこに存在するのである」(ジンメル, [1994], 同上書, 250頁. 原著, 725頁) と述べ、他者の存在が「まなざし」を成立させるためには必要であることを指摘している。

12) ジンメル, G., 茅野良男訳, [2004], 生の哲学, ジンメル著作集7《新装復刊》, 白水社, 90頁. 原著, 271頁.

と他者との相互注視においては、運動能力以上の事柄を把握しようとするだろう。この相互注視について、再び剣道における〈私〉の「まなざし」を例に考察したい。剣道では〈私〉と相手が正対して向かい合う。この時、〈私〉は相手へ「まなざし」を向けることによって相手の動作を把握しようとする。相手もまた〈私〉に「まなざし」を向けている。〈私〉は、相手の動作の把握によって相手との距離をはかる。それは「間」と呼ばれる。つまり、剣道における「まなざし」は、〈私〉が相手を見て、相手から見られた時に生じる相互作用を成立させる働きであると言えよう。この「まなざし」による相互作用を通じて「間」が形成される。この「間」は、〈私〉と他者の関係を決定づけるために必要な時間性・空間性を形成する。したがって、剣道において〈私〉は、相手へ「まなざし」を向けることによって、「相手のどこを見るのか」という対象の「切り出し」、「相手が攻撃するのか防御するのか」という「意味付与」、「どのように相手が〈私〉に立ち現れるのか」という「統一化」をおこない、相手に働きかけている。同時に〈私〉は、相手から「まなざし」を向けられることによって、相手からの働きかけを了解する。この「まなざし」による相互作用を通じて把握される相手は、もっとも直接で純粋な相互関係を持つ他者である。〈私〉はその相手の動作を把握し、その相手に対応した働きかけをおこなう¹³⁾。それは、マニュアル化された行動ではなく、臨機応変な行動である。この時、注意すべき点は、〈私〉は自らの実践に必要最低限の内容として現れる相手しか見ることができないし、相手からもその内容として見られる、ということである。すでに述べたように、運動実践においては「実践」という制限が運動能力によって変化するからである。

1-3. 身体的自己移入（身体的コミュニケーション）による「まなざし」

—シュミッツの身体と感情の現象学についての考察から—

シュミッツは、相互作用が「身体的自己移入*Einleibung*」ないし「身体的コミュニケーション*leibliche Kommunikation*」によって成立可能である、と説明している¹⁴⁾。この「身体的自己移入」ないし「身体的コミュニケーション」は、自らの身体がより大きな構造体

13) ジンメルによれば、「相互注視は、いやしくも存在するもっとも直接的な、もっとも純粋な相互関係である。」（ジンメル, [1994], 前掲書, 249頁, 原著, 723頁）と説明されている。さらに、「まなざし」による「相互作用は、直接の機能が止んだ瞬間に消滅する。」（ジンメル, [1994], 同上書, 249頁, 原著, 724頁）。

14) シュミッツは、「わたしの答えは、それ（感応）を身体的コミュニケーションないしは感情的自己移入にひっかけて）身体的自己移入として規定するというものである。」（括弧内引用者）（シュミッツ, H., 小川侃編, [1986], 『身体と感情の現象学』, 産業図書, 147頁）と述べている。Schmitz, H., 1972, *Über leibliche Kommunikation*, in : A. a. O. Heft 1, Jahrgang 20, S.4 - S. 32.

の中に入り込んだ時に生ずるとされ、その構造体は、狭さ、広さ、方向づけ等によって構成されているという。この説明に「まなざしBlick」の例が用いられる。彼は、「眼差し(Blick)というのは、特別な意味をもつ身体的方向定位である。」(括弧内引用者)¹⁵⁾と説明している。例えば、〈私〉が相手に「まなざし」を向ける時、〈私〉の身体は相手に向かって方向づけられている。また、「まなざし」によって他者と関係を形成する時、精神的で心的な態度の交換よりもはるか以前に、身体的な形成、変形、評定が生じている。それは、「相互的な身体的自己移入」¹⁶⁾によって現れているという。すなわち、〈私〉と相手がお互いの身体に対して「まなざし」を向けることによって、〈私〉は相手の動作に対応し、相手との関係の中で何をすべきかに気づくことになる。このことは、これまでに述べてきた〈私〉と他者の相互作用の基盤を示していると捉えることができよう。この基盤が「身体の相互作用」である。

以上の考察から、次のように「まなざし」を説明することが可能である。「まなざし」と身体には密接な関係性がある。それは、〈私〉が「まなざし」によって身体を対象化できる、ということである。しかし、その対象化は、もっとも直接で純粋な相互関係の中で現れる身体である。さらに、「まなざし」は「絶対的なここ」としての身体を基準とした「固有の領分」を通じて生ずる働きである。また、「まなざし」による相互作用の場合、我々は身体的自己移入(身体的コミュニケーション)に基づいて、他者との相互作用に入り、お互いを把握している。この「まなざし」は、行動次元における相互作用だけではなく、「身体の相互作用」の次元から生ずる働きである。

2. 運動実践を通じた身体観の変容可能性

前節までの考察を基に、運動実践を通じた身体観の変容可能性を示したい。なお、ここで言う身体観とは、日常生活において人々が漠然として持っている身体の見方であり、哲学において取り上げられている思想ではない¹⁷⁾。その身体観には自己の身体および他者の

15) シュミッツ, [1986], 同上書, 56頁。なお、彼はこの特別な意味について、「身体的方向定位は狭さから広さへと向うのであり、逆に広さから狭さへと向うのではない。」と説明している(シュミッツ, [1986], 同上書, 56頁)。

16) シュミッツによれば、「たがいに身体的に自己を移入しあうことによって、大きな身体的全体を織りなしている。同じことはスポーツにも言えるのであって、いっしょによく練習をつんだ相手とであればひとりでの調子があうといった場合がそうである。」(シュミッツ, [1986], 同上書, 148-149頁)と説明される。それは、「相互的な身体的自己移入」(シュミッツ, [1986], 同上書, 154頁)であるという。

身体の見方がある。では、なぜ「まなざし」が「身体観」の研究に対して有効に働くとと言えるのだろうか。我々は、肉体や身体運動を見ることが可能である。しかし、相手の能力や心の領域については「読み取る」他ない。この「読み取る」ことが「まなざし」の働きに含まれており、「身体観」を形成していると言えよう。

体育授業について考えれば、授業前に壁に寄り掛かる学習者が多いという現状を確認することができる。しかし、その現状が体育・スポーツを専門とする学生たちの間にも起こっているとなるとどうだろうか。学生の中には、体育館やグラウンド、更衣室で寝そべっている者さえいる。筆者自身、その状況に出くわした時は愕然とした。彼らに理由を聞いてみると、「前の授業で疲れているので授業が始まるまで休んでいる」、「1限目だから眠い、実技は疲れる」ということであった。筆者の学生時代を思い起してみると、同様の状況がなかったとは言い切れない。しかし、多くの場合は授業の準備や課題の予習等を行っていたように思う。「ジベタリアン」として話題になった同様の行動は、現在においては「寝そべる」という段階にまで入っているのだろうか。さらには、彼らは「他者」を意識することがないのであろうか。この「他者」についての焦点化は、すでに石垣らによって問題提起され、「自己－他者」の関係や身体性と関連づけられながら「身体的なわれわれ」という体育学独自の観点から論じられている¹⁸⁾。さらに、滝沢らは身体観を検討する動機として同様の「違和感」を挙げている¹⁹⁾。

以上の体験を振り返ると、筆者の身体観に「ずれ」が生じていることがわかる。では、その「ずれ」は何から生じているのだろうか。本節では、その「ずれ」を明らかにし、特に運動実践者の立場から考察を行う。この考察によって、「指導者－学習者」という枠組みを問い返し、運動実践においてこそ学ぶことのできる身体観及びその変容可能性について論じたい。

17) すでに取り上げているように、哲学領域では身体論の中に身体の見方が論じられてきた。なお、本稿における身体観は、滝沢らの見解に基づいている。滝沢文雄・田中愛・高橋浩二、[2007]、「日独英比較から捉えた身体観の生成過程」、『体育・スポーツ哲学研究』、日本体育・スポーツ哲学会、第29巻1号、39-49頁。

18) 石垣健二・深澤浩洋・関根正美、[2007]、「教科体育における『超越論的他者』の措定：『身体的なわれわれ』の成立」、『体育学研究』、第52巻、327-328頁。

19) 具体的には、「筆者らは、身体に関わる報道内容に違和感を抱くだけでなく、ここ数年来、日常的な大学生とのやり取りにおいて、彼らの身体的な異常さを感じている。それは特に身体観の問題として焦点化できるようだ。」という指摘である。滝沢ほか、[2007]、前掲著、30頁。

2-1. 運動実践を通じた「まなざし」の育成

運動能力を育成するためには、運動実践を通じた学習が必要であることは誰もが認めるであろう。また、前節までの考察によって、運動能力の育成は「まなざし」の能力を育成することにも関係していることが示されている。しかし、ただやみくもに運動能力を育成するだけでは不十分である。すなわち、「まなざし」を意図的に育成することが必要である。例えば、学習者の「まなざし」がある一つの事柄にしか向くことができないならば、指導者は異なる事柄へ彼らの「まなざし」を向け換えさせる必要がある。学習者の「まなざし」がボールにしか向けられていないことを指導者が把握すれば、指導者はボール以外に「まなざし」を向けるよう指示することができる。また、学習者自身が自らの「まなざし」の画一化に気づくことができれば、「ボールを見なさい」という指示を「相手ではなく、ボールを見なさい」という指示として受けとることができる。この「まなざし」は、他者の実践や自らの実践がどのように〈私〉に対して現れるのかについて了解するために用いられる。重要なことは、「まなざし」の基盤が「固有の身体」にあることである。我々は、運動実践を通じて自らの身体を変容させることができる。この変容は、「まなざし」の変容に影響を及ぼす。「まなざし」の変容は、身体に対する見方をも変容させる。したがって、「まなざし」の変容は、身体観の変容可能性を生み出すのである。この変容を意図的に担うことができるのは身体教育と言えよう。特に、学校体育の場において身体観の変容を扱うことによって、科学的な身体観だけではない、「固有の身体」を基準とした身体観を学習することが可能であろう。学習者は、運動実践によって「固有の身体」とは何かを学習し、実践的能力を培ってゆく。この時、「まなざし」を通じた「身体の相互作用」の実践によって他者「固有の身体」が了解される。さらに、この了解が「身体の相互作用」を充実させる。したがって、体育教師は学習者の「固有の身体」を育成することによって、他者に対する「まなざし」を通じた具体的な「実践としての働きかけ」の能力を育てることが必要になる。学習者は、その働きかけの学習を通じて、他者との巧みな運動実践を実現させるような対応能力を身につけてゆくことができる。そのために体育教師は、学習者に対して「実践としての働きかけ」を授業に取り入れ、「身体の相互作用」を体験させることが重要である。

2-2. 体育学における身体観の検討

体育学における身体観の研究は、体育学者及び体育教師あるいは学習者を対象に進められてきたと言えよう。例えば、雑誌『体育の科学』においては、2005年から2007年まで「体育人と身体観」という連載が生まれ、体育学に関わる24名の研究者・教育者の身体観及び

体育観が検討されている²⁰⁾。結論を先取りすれば、彼らの身体観は科学的なそれであり、体育哲学の領域において取り扱われているような「文化性」や「働きとしての身体」は指摘されていない²¹⁾。彼らにとっての身体観は、教育及び自然科学、特に生理学の観点から捉えられていたと言えよう。また、身体と心との関係を重視する者と身体を科学的に捉える者との分けることができる。なお、佐藤と木庭が「『身体観』を思想史としてみた場合、身体への認識は必ずしも十分なものであったとは言えません。むしろ否定的価値観によって貶められてきたと言ってもよいでしょう。」²²⁾と問題提起しているように、欧米人の身体に比べて日本人の身体が劣っており、その差を埋めるために体育（体操）をおこなってきたという見解を見出すことができる。ただ、注意しなければならないのは、佐藤らの指摘が日本における身体観の思想史だけでなく、ギリシャ時代からの身体観が想定されると考えられることである²³⁾。日本人の身体観については別の場での議論が必要だろう。

上述した問題は、2007年の体育哲学専門分科会におけるシンポジウムA「身体論への多元的アプローチ（1）身体論の系譜学」²⁴⁾、及びシンポジウムB「自然科学からみた身体教育論」²⁵⁾、2008年の「身体論への多元的アプローチ（2）身体論の多層的展開」²⁶⁾において身体及び身体観に関する議論として報告されている。例えば、新保は、「『身体における自然性』が、近代科学の誕生によってどのように変化したのか、そしてそれが今日を生きる人々の身体観という現代的状況にどのような影響を与えたのか」²⁷⁾と指摘し、「自然

20) 体育の科学, [2005-2007], 「連載 体育人と身体観」, 『体育の科学』, 杏林書院, 第55巻7号－第57巻8号.

21) 例外は前川である。彼の身体観は、「身体についての見方は二重であり、また三次元構造」と紹介されている。片岡暁夫, [2006], 「前川峯雄(1906-1981)」, 「連載 体育人と身体観16」, 『体育の科学』, 杏林書院, 第56巻12号, 978頁.

22) 佐藤臣彦・木庭康樹, [2009], 「身体論への多元的アプローチ（2）身体論の多層的展開」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第39巻, 55頁.

23) 欧米人と日本人の身体観の比較については、次の著書を参照されたい。松波健四郎・荒木祐治, [1985], 『身体観の研究—美しい身体と健康— 新版』, 専修大学出版局.

24) 佐藤臣彦・木庭康樹, [2008], 「身体論への多元的アプローチ（1）身体論の系譜学」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 87-108頁.

25) 杉山英人, [2008], 「自然科学からみた身体教育論—体育における身体と動きの関係性—」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 109-112頁. 下永田修二, [2008], 「動きの分析からみた身体及びその育成」, 同上著, 113-116頁. 小宮山伴与志, [2008], 「反射機構からみた身体及びその育成」, 同上著, 117-120頁.

26) 佐藤臣彦・木庭康樹, [2009], 「身体論への多元的アプローチ（2）身体論の多層的展開」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第39巻, 55-56頁. 新保淳, [2009], 「科学的身体論～身体における自然性～」, 同上著, 29-37頁. 杉山英人, [2009], 「実践的身体論～身体における文化性～」, 同上著, 61-67頁.

27) 新保, 同上著, 30頁.

科学的アプローチによって構築された身体観は、人間という存在における身体の『在り方』全体を捉える事ができないために、人々が日々生きる上での眼前の問題に対して対処的な回答しか与えることができないのではないか。」²⁸⁾と問題提起している。彼は、自然科学的アプローチを「要素還元的」、「分析的」と捉え、「身体に対する知的理解を、『客観的』、『数量的』な処理を経ることによって、因果連関の解明を目的として表現されてきた」²⁹⁾とまとめ、「知的探究のプロセスから、我々の身体が、人間あるいは社会の要求する『完成図』に向けて人為的に制作しようという『身体観』をもたらしたと言えよう。」³⁰⁾と指摘している。また、杉山は、身体観を検討するためには「文化を生きる身体」という側面から考えなければならないと主張している。すなわち、身体性は文化的多様性（可能性／規定性）として表出するものであり、それは「それぞれの身体感覚やそれに基づいた身体観の相違として現象することになる。」³¹⁾という指摘である。なお、杉山は実践的身体論について以下のように指摘している。「身体性が文化的規定性として機能する場合、それはどのような身体感覚が表出されており、そしてそれはどのような身体観として生のスタイルを形成しているのかということを問うことが実践的身体論ということが出来る。」³²⁾という指摘である。すなわち、実践的身体論を運動実践に焦点化して考えれば、運動を実践するとき生ずる具体的な感覚（ボールを投げる強さ、握る強さ、リリースする瞬間、等）があり、その身体感覚を有している個人がどのように運動を実践しているかを検討することと捉えることができよう。

また、既に挙げた滝沢の身体観研究にも触れる必要があるだろう。彼によれば、「人々の抱く身体観は、哲学で議論されてきた心身関係の理論だけでは捉えきれない。人々は論理的な一つの身体観を持っているわけではないからである。身体観の教育を具体化するためにも、それら身体観がどのように生成されるのか、という問いに答える必要がある。」³³⁾と問題提起している。彼は、「望ましい身体観の教育が必要である。」と主張し、実践・実践・学習・イメージという四つの思考枠組みが身体観を成立させていると論じている。

28) 新保、同上著、30頁。

29) 新保、同上著、36頁。

30) 新保、同上著、36頁。

31) 杉山英人、[2009]、前掲著、61-62頁。

32) 杉山、同上著、67頁。

33) 滝沢ら、[2007]、前掲著、30頁。

2-3. 運動実践を通じた身体観の変容可能性

本項では、特に、運動実践者としての〈私〉が身体をどのように見ているのかについて考察する。運動実践者としての〈私〉にとって身体がどのように立ち現れるのか、特に「〈私〉-他者」という関係から検討したい。

筆者自身の授業体験から述べれば、筆者は他者の運動を次のように見えてしまっているようである。例えば、「背中合わせの運動」について説明したい。この運動は、2人組で両手を上げた状態で掴み、背中を合わせて立ったり座ったりする運動である。学生同士のやり取りを見ていると次のことに注目する。すなわち、背中同士が全体的に密着しているか、隙間がある場合、どこに力がかかっているか、立ち上がる時にどこを基準に立ち上がろうとしているのか、ということである。また、この「背中合わせの運動」の場合、実践者としての〈私〉は、他者の身体が見えることはない。相手の背中が〈私〉の背中のどこを押しているのかという「感じ」、力のかかり具合、等が〈私〉には現れている。それ自体が〈私〉にとっての他者の身体なのである。したがって、この身体は輪郭をもって表面に現れている肉体（対象化された身体）ではなく、まさに他者「固有の身体」として現れていると言えよう。

他者との背中合わせの運動の場合、〈私〉にとって他者の背中は壁と同一ではない。すなわち、他者の背中は「動かない物体」ではないということであり、意図が読めない「身体」である。では、彼らにとって他者の背中はどのように現れているのか。この立ち現われは、個々の運動能力によって左右されると言えよう。すなわち、何かを利用して立ち上がる経験を積んでいる者とそうでない者では差が生ずるということである。例えば、男子学生は主に腕力を用いて立ち上がろうとする。したがって、頭上で組んでいる手が肩付近まで曲がるか、腰周辺まで下がってくるのである。それに対して女子学生の場合は、腕力ではなく背中を押す力で立ち上がろうとする者が多い。しかし、彼女らにとって背中を押して立ち上がるという体験が少ないために、肩部分のみで他者の背中を押してしまい、上方向への力とはなっていない。したがって、肩同士で押し合い、腰部分が離れてしまうという状態になっている。この時、彼らにとって自らの身体と他者の身体はどのように立ち現れているのか。思い通りにならない身体なのだろうか。動かない身体なのだろうか。彼らの発言等や、その運動実践から次のような事柄に気づく。すなわち、彼らにとって他者の身体は「自分の意図通りに動かない身体」なのである。この身体は、自らの身体にとっても感じているようである³⁴⁾。

この問題は、体育における言語指導の限界や運動観察の限界を言い表しているのかもしれない。したがって、スポーツ運動学において言われているような「技の構造」や「技の

しくみ」について、素直に注目することのできる学生は少ないと言えよう³⁴⁾。補足すれば、そのような学生たちでも練習を続けることによって最後には「できてしまう」学生が多いという現状がある。だからこそ、彼らにとっては「背中を合わせて上がることができればそれでいい」ことが主目的になるのかもしれない。ここに「実践」を狭義に解釈することの危険性が生ずる。彼らにとって運動実践はどこまでを意味するのかという問題である。

また、課題を上手に遂行できる学生は、「できる」ということで満足しているようである。ある課題が「できる」ということは望ましいことだと考えることは可能である。しかし、その「できる」は実践者本人にとっての「できる」に過ぎず、周囲の者（教員、学生）にとっても「できる」と判断されるようなそれではない。一方、上手にできない学生は、「苦手だから仕方ない」、「体が硬いから無理だ」という理由をつけて課題の完成に向けて取り組もうとしない。この問題も先ほど述べた「本人にとって『できる』」という段階に留まっているようである。

さて、これまでの「他者の立ち現われ」の問いを解決するために、彼らが自らの身体に対する評価や他者の身体の観方に注目する必要性が生ずる。彼らは運動実践においても一方向的な身体観を持っているのではないだろうか。例えば、誰もが「できる」者のイメージに追われているということである。このことが悪いというわけではない。しかし、「できない」者がいくら「できる」者のイメージを追いかけたとしても、それは他者にとっての「できる」であり、自らの「実践としての『できる』」ではない。運動実践において〈私〉は常に他者の身体に注目せざるを得ない。なぜなら、〈私〉と対峙する他者は、常に〈私〉に対して彼の能力を表しているからである。しかも、他者の身体だけでなく、〈私〉の身体自身にも注目せざるを得ない。その時の身体は、常に他者と比較された状態で現れている。運動実践においては「身体」が常につきまってくるのである。〈私〉にとって他者の身体は、ある特定の動作が「できる」、「できない」と判断する指標になる。この「できる」は、〈私〉と他者が対峙する時に〈私〉が実践しようとしている運動に対し相手が対応「できる」か「できない」か、というレベルで現れている。

以上の考察から、現段階における結論は、次のように述べることができよう。すなわち、日常生活において我々は、一人ひとりの身体を見ているのではなく、その人自体を見てい

34) なお、神経科学の領域では、1990年代から「ミラーニューロン」が注目されている。この神経によって人間は模倣したり、運動を記憶しているというのである。リズラッティ、G.、シニガリア、C.、柴田裕之訳、茂木健一郎監修、[2009]、『ミラーニューロン』、紀伊國屋書店。

35) スポーツ運動学については次の著書を参照されたい。マイネル、K.、金子明友訳、1981、『マイネル スポーツ運動学』、大修館書店。

ということ、運動実践においては、その人の身体能力を基礎とした「固有の身体」として現れている、ということである。それが運動実践における「身体観」を生じさせていると言えよう。

3. 結

本稿の目的は、運動実践における「まなざし」を身体運動との関係から考察し、運動実践を通じた身体観の変容可能性を示すことであった。考察の結果、次のことが明らかにされた。第一に、「まなざし」が身体と密接な関係にあることである。第二に、「まなざし」が他者との相互作用を成立させることである。〈私〉が他者に対応できるということは、常に他者との相互作用を成立させていることが必要である。この相互作用は、直接で純粋な他者との関係を生み出す。その時〈私〉は、見ることの三つの機能である「切り出し」、「意味付与」、「統一化」を伴った「まなざし」によって相手に働きかけている。第三に、「まなざし」は固有の領分を基盤に働いていることである。その領分は、「絶対的なここ」としての身体性である。我々はこの基盤である身体から、「まなざし」を相手に向け、相手に対して働きかけているのである。この点から考えると、身体レベルの相互作用を導き出すことができる。それが身体的コミュニケーションないし身体的自己移入に基づいた、他者との「身体の相互作用」である。

第四に、運動実践による身体観の変容可能性は、運動実践における「まなざし」の学習によって可能になることである。運動実践を通じた身体の変容が、「まなざし」の変容を生じさせる。それが、身体に対する見方をも変容させる。この変容については、学校体育において扱うことによって新たな身体観を学習することが可能になるであろう。それは、自らの身体を基準とした身体観である。運動実践において学習することのできる身体は、「固有の身体」であり、その身体を基にした身体観が生ずる。我々は、運動実践を通じて、特定の運動技能、仲間との協力の仕方、運動の学び方、だけではなく、身体観をも学ぶことができる。さらには、その身体観を変容させることもできる。身体観の変容によって、他者の立ち現われに変化が生ずる。すなわち、大多数の他者ではなく、他者「固有の身体」として現れる他者である。

次稿では、身体教育において扱うことができる身体観について考察する。この身体観は、「まなざし」によって他者と関係づけられた「固有の身体」を基盤として生じている。この考察を通じて、「まなざし」と身体観との関係を明確にし、身体観教育の必要性を検討したい。

参考文献リスト

- 石垣健二・深澤浩洋・関根正美, [2007], 「教科体育における『超越論的他者』の措定:『身体的なわれわれ』の成立」, 『体育学研究』, 日本体育学会, 第52巻4号, 327-340頁
- 金子明友, [2009], 『スポーツ運動学』, 明和出版
- 小宮山伴与志, [2008], 「反射機構からみた身体及びその育成」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 117-120頁
- 佐藤臣彦・木庭康樹, [2008], 「身体論への多元的アプローチ(1) 身体論の系譜学」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 87-108頁
- 佐藤臣彦・木庭康樹, [2009], 「身体論への多元的アプローチ(2) 身体論の多層的展開」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第39巻, 55-56頁
- 下永田修二, [2008], 「動きの分析からみた身体及びその育成」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 113-116頁
- 新保淳, [2009], 「科学的身体論～身体における自然性～」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 29-37頁
- 杉山英人, [2008], 「自然科学からみた身体教育論—体育における身体と動きの関係性—」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 109-112頁
- 杉山英人, [2009], 「実践的身体論～身体における文化性～」, 『体育哲学研究』, 日本体育学会体育哲学専門分科会, 第38巻, 61-67頁
- サルトル, J-P., 松波信三郎訳, [2007], 『存在と無 II 現象学的存在論の試み』, ちくま学芸文庫 (Sartre, J-P., 1943, *L'Être et le Néant*. Éditions Gallimand, Paris.)
- シュミッツ, H., 小川侃編, [1986], 『身体と感情の現象学』, 産業図書 (Schmitz, H., 1986, *Phänomenologie der Leiblichkeit und der Gefühle* (Hrsg. v. Tadashi OGAWA). Schmitz, H., 1972, *Über leibliche Kommunikation*, in : A. a. O. Heft 1, Jahrgang 20, S. 4-S. 32. Schmitz, H., 1985, *Phänomenologie der Leiblichkeit* (Hrsg. v. Hilarion Petzold). Paderborn.)
- ジンメル, G., 居安正訳, [1994], 『社会学・下』, 白水社 (Simmel, G., 1908, *Soziologie Untersuchungen über die Formen der Vergesselschaftung*, Dunker & Humboldt, Berlin.)
- ジンメル, G., 茅野良男訳, [2004], 『生の哲学』, ジンメル著作集7《新装復刊》, 白水社 (Simmel, G., 1918, *Lebensanschauung. Vier metaphysische Kapitel*. München und Leipzig.)
- 体育の科学, [2005-2007], 「連載 体育人と身体観」, 『体育の科学』, 第55巻7号-第57巻8号, 杏林書院
- 高橋浩二, [2008], 「運動実践の基盤となる『身体の相互作用』—〈他者〉との相互作用についての現象学的考察—」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学会, 第30巻2号,

113-126頁

- 高橋浩二, [2008], 「運動実践において独自に現れる『まなざし』: ジンメル の相互作用論の考察から」, 『体育学研究』, 日本体育学会, 第53巻2号, 265-276頁
- 瀧澤文雄, [1995], 『身体 の論理』, 不昧堂出版
- 滝沢文雄, [2005], 「身体観の生成過程（その1）—身体観の成立要因およびそれについての質問紙—」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学会, 第27巻1号, 61-73頁
- 滝沢文雄・田中愛・高橋浩二, [2007], 「日独英比較から捉えた身体観の生成過程」, 『体育・スポーツ哲学研究』, 日本体育・スポーツ哲学会, 第29巻1号, 39-49頁
- フッサール, E., 立松弘孝訳, [1965], 『現象学 の理念』, みすず書房 (Husserl, E., 1950, *Die Idee der Phänomenologie*, Fünf Vorlesungen. Herausgegeben und eingeleitet von Biemel, W., Martinus Nijhof, Haag.)
- フッサール, E., 浜渦辰二訳, [2001], 『デカルト的省察』, 岩波書店 (Husserl, E., 1950, *Cartesiansche Meditationen. Eine Einleitung in die Phänomenologie*, in: Husserliana Bd. I, Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge, Herausgegeben und eingeleitet von Strasser, S., Martinus Nijhoff, Haag.)
- マイネル, K., 金子明友訳, [1981], 『マイネル スポーツ運動学』, 大修館書店 (Meinel, K., 1960, *Bewegungslehre: Versuch einer Theorie der sportlichen Bewegung unter pädagogischem Aspekt*, Berlin, Volk and Wissen.)
- マイネル, K., 金子明友編訳, [1998], 『マイネル遺稿 動きの感性学』, 大修館書店 (本著は, 著者の論文4編と64の研究メモを訳者が再構成し, 出版されたものである。) (Meinel, K., *Ästhetik der Bewegung*.)
- 松波健四郎・荒木祐治, [1985], 『身体観の研究—美しい身体と健康— 新版』, 専修大学出版局
- メルロー=ポンティ, M., 滝浦静雄・木田元訳, [1966], 『眼と精神』, みすず書房 (Merleau-Ponty, M., 1953, *Eloge de la Philosophie L'oeil et L'esprit*. Éditions Gallimard, Paris.)
- メルロー=ポンティ, M., 竹内芳郎・小木貞孝共訳, [1967], 『知覚の現象学1』, みすず書房 (Merleau-Ponty, M., 1945, *Phénoménologie de la Perception*. Éditions Gallimard, Paris.)
- リゾラッティ, G., シニガリア, C., 柴田裕之訳, 茂木健一郎監修, [2009], ミラーニューロン, 紀伊國屋書店。 (Rizzolatti, G. and Sinigaglia, C., 2006, *so quel che fai: Il cervello che agisce e I neuroni specchio*. Raffaello Cortina Editore Milano, via Rossini 4.)